

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2020 年 11 月

「闘争と勇氣」「心霊術—それは何か? (II)」「聖霊によって何を悟ったか」「豆腐入り青汁団子」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

心霊術—それは何か? (II)

4

聖書の教え

朝のマナ

闘争と勇気

7

Conflict and Courage

現代の真理

「聖霊によって何を悟ったか」

38

わたしたちが信仰の一致に到達するまで

力を得るための食事

「豆腐入り青汁団子」

42

レシピ

お話コーナー

「行って、わたしの弟子たちに伝えなさい (II)」

44

イエスの物語

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス www.4angels.jp

メール sdarm.shomaru@gmail.com

発行日 2020 年 10 月 4 日

編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Getty Image on Front page; Sermon View
on page 44

Printed in Japan

信者とキリストとの関係にある特権

キリストは、われわれがキリストと一つ精神になるために、われわれと一つ肉体になられた。…キリストの真の品性を見、キリストを心に受け入れる者は、永遠のいのちを持つ。…

イエスはこう言われた、「わたしは命のパンである。…天から下ってきたパンを食べる人は、決して死ぬことはない。わたしは天から下ってきた生きたパンである。それを食べる者は、いつまでも生きるであろう」(ヨハネ 6:48-51)。…

キリストはご自分の象徴的な表現をやわらげようとされなかった。彼はさらに強いことばで、その真理をくりかえされた、「よくよく言っておく。人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、…わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる」(ヨハネ 6:53-56)。

イエスの肉を食べ、その血を飲むということは、キリストを自分自身の救い主として受け入れ、キリストがわれわれの罪を許して下さることと、彼のうちにあるときわれわれが完全であるということとを信じることである。キリストの愛を見つめ、これについて瞑想し、これを飲むことによって、われわれはキリストの性質にあずかるものとなるのである。…

しかしこのような比喻でさえ、信者とキリストとの関係にある特権を表わしてはいない。イエスは、「生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きるであろう」と言われた(ヨハネ 6:57)。神のみ子が天父への信仰によって生きられたように、われわれもキリストへの信仰によって生きるのである。イエスは、神のみこころにまったく服従されたので、その生涯には天父のみがあらわされた。…(各時代の希望中巻 135-138)

イエスは、毎朝神との交わりに幾時間かを過ごしたあとで、人びとに天の光を与えるために出ていかれた。イエスは、日ごとに聖霊の新しいバプテスマをお受けになった。神は、新しい一日の早くからイエスの目をさまし、彼の心とくちびるに恵みをそそがれた。それは、彼が人びとに分け与えるためであった。(キリストの実物教訓 114)

神がわたしたちにお与えになるのは、わたしたちが他に奉仕するためである。そして、その奉仕によって神のようになるためである。(キリストの実物教訓 117)

キリストが神からお受けになったものはみな、わたしたちも持つことができるものである。だから求めて受けることにしよう。ヤコブのような不屈の信仰と、切に求めてやまぬエリヤの精神をもって、神の約束なさったことが全部与えられるように求めなさい。(キリストの実物教訓 129)

第 19 課 心霊術—それは何か? (II)

霊を試す

わたしたちが神の御使、もしくは悪天使とかかわりをもって来たかを、どのようにして知ることができるでしょうか。将来、どのようにして違いを識別することができるでしょうか。聖書にはいくつかの明確な聖書の検査をあげられています。「人々があなたがたにむかって『さえずるように、ささやくように語る巫子および魔術者に求めよ』という時、民は自分たちの神に求むべきではないか。生ける者のために死んだ者に求めるであろうか。ただ教とあかしに求めよ。もし彼らがこの言葉によって語らないならば、それは彼らのうちに光がないからである」(イザヤ 8:19,20 欽定訳)。

心霊術の教えは、神の律法やみ言葉の証に調和しているでしょうか。その反対に、心霊術は、罪もなく、死もないと、すなわち、エデンの園でへびによって語られたのと同じ偽りを教えています(創世記 3:4)。

降霊は、通常、薄暗い屋内で行われます。それらはつねに未知の存在との対話というかたちをとります。多くの場合、死者と語ったり、または呪文で死者と見える者を呼び出したりします。そこで現れる霊は、すでに死んでいる近親者や他人、または聖徒たちになりすました悪魔です。ある者は、キリストご自身であると主張さえしてきました。もし、あなたがこのような見せものを見るように誘われた場合には、次のキリストの警告を思い出してください。「だから、人々が『見よ、彼は荒野にいる』と言っても、出て行くな。また『見よ、へやの中にいる』と言っても、信じるな。」(マタイ 24:26)。

使徒ヨハネは次のように訓告しています。「愛する者たちよ。すべての霊を信じることはしないで、それらの霊が神から出たものであるかどうか、ためしなさい。多くのにせ預言者が世に出てきているからである」(ヨハネ第一 4:1)。

霊を試すということは、それらを「律法と証」とに照らすことを意味しています。もし彼らが述べるのが神のみ言葉と一致しないのであれば、彼らとかかわりをもってはなりません。ヨハネもまた、わたしたちがどのように霊を試すことができ

るかを教えてください。「あなたがたは、こうして神の霊を知るのである。すなわち、イエス・キリストが肉体をとってこられたことを告白する霊は、すべて神から出ているものであり、イエスを告白しない霊は、すべて神から出ているものではない。これは、反キリストの霊である。あなたがたは、それが来るとかねて聞いていたが、今やすでに世にきている」(ヨハネ第一 4:2,3)。

心霊術は、聖書が、誤りのない神のみ言葉であるということを否定します。聖書を他の本と同じにみなし、聖なる神のみ言葉として認めることを拒否します。使徒ペテロは次のように宣言しています。「聖書の預言はすべて、自分勝手に解釈すべきでないことを、まず第一に知るべきである。なぜなら、預言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、神によって語ったものだからである」(ペテロ第二 1:20,21)。

聖書において、魔術は忌むべきものとして責められています。「あなたがたは口寄せ、または占い師のもとにおもむいてはならない。彼らに問うて汚されてはならない。わたしはあなたがたの神、主である」(レビ記 19:31)。

「あなたの神、主が賜わる地にはいったならば、その国々の民の憎むべき事を習いおこなってはならない。あなたがたのうちに、自分のむすこ、娘を火に焼いてささげる者があつてはならない。また占いをする者、卜者、易者、魔法使、呪文を唱える者、口寄せ、かななぎ、死人に問うことをする者があつてはならない。主はすべてこれらの事をする者を憎まれるからである。そしてこれらの憎むべき事のゆえにあなたの神、主は彼らをあなたの前から追い払われるのである。あなたの神、主の前にあなたは全き者でなければならない」(申命記 18:9-13)。

別のテスト方法は、マタイ 7:20 にあります。「このように、あなたがたはその実によって彼らを見わけるのである。」

悪霊の実とはどのようなものだろうか？

「肉の働きは明白である。すなわち、不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、まじない、敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、宴楽、および、そのたぐいである。わたしは以前も言ったように、今も前もって言うておく。このようなことを行ふ者は、神の国をつぐことがない」(ガラテヤ 5:19-21)。

このような肉の働きの中には、魔術、異端、泥酔が挙げられていることに注意しましょう。これらの実は、いずれも近代の心霊術の創始者たち—すなわちフ

オックス姉妹一の生活に現われています。彼女たちは、多数の人々を心霊術による異端へと導きましたが、それは聖書において魔術と呼ばれています。彼らは共に、アルコール中毒者として人生を終えました。

これに対し、神の御霊の実は何でしょうか。「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実（信仰）、柔和、自制であって、これらを否定する律法はない」（ガラテヤ 5:22,23）。

わたしたちの唯一の安全

「最後に言う。主にあって、その偉大な力によって、強くなりなさい。悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい。わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである」（エペソ 6:10-12）。

わたしたちは、通常の敵とは異なるこれらの悪霊に対して警戒するよう求められています。彼らは非常に強力な霊的代理者です。わたしたち自身の力では、それらに対抗することはできません。しかし、神はわたしたちのための備えを用意してくださいました。神が言われることに注意を払うことによって、わたしたちはサタンとその使たちによる攻撃から完全に守られることができます。

「それだから、悪しき日にあたって、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために、神の武具を身につけなさい。すなわち、立つて真理の帯を腰にしめ、正義の胸当てを胸につけ、平和の福音の備えを足にはき、その上に、信仰のたてを手に取りなさい。それをもって、悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう」（エペソ 6:13-16）。

その武具は完全なものです。わたしたちがそれを身に付ければ、必ず危険の時に保護されます。しかし、体の一カ所だけが防御されていないことに注目して下さい、背中です！つまり、わたしたちは決して敵に背中を見せてはならないということです。わたしたちは、悪に対して立ち向かう限り、神の武具によって完全に守られます。わたしたちが戦いのためにこのように準備するとき、決して敗北を恐れる必要はありません。「しかし、わたしたちを愛して下さったかたによって、わたしたちは、これらすべての事において勝ち得て余りがある」（ローマ 8:37）。

闘争と勇気

Conflict and Courage



11 月

11月1日

率直に語る

「そこでイエスは彼らに言われた、『それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか』。シモン・ペテロが答えて言った、『あなたこそ、生ける神の子キリストです』。」
(マタイ 16:15, 16)

ペテロは、はじめからイエスをメシヤと信じていた。バプテスマのヨハネの説教を聞いて罪をさとった他の多くの者たちは、ヨハネが投獄されて死刑に処せられると、ヨハネの使命について疑いをいだきはじめた。彼らはこんどは、イエスが長い間待ち望んでいたメシヤであるかどうかを疑った。……だがペテロとその仲間たちは忠誠を変えなかった。救い主にほんとうに従っている者たちの信仰は、きのうは称賛し、きょうは非難するといったような人々の移り変わる態度によって、破壊されることはなかった。……

ペテロは十二人の信仰を表明していた。それでも弟子たちは、まだまだキリストの使命を理解していなかった。祭司たちや役人たちの反対と悪宣伝は弟子たちをキリストから引き離すことができなかったが、それでも彼らのうちに大きな困惑を生じさせた。……時々イエスからのとうとい光が彼らを照したが、それでも彼らは、しばしば暗がりを手ざぐりで進んでいる人々のようであった。しかしこの日、彼らが信仰の大きな試みに直面させられる前に、聖霊は力をともなって彼らの上にとどまった。しばらくの間彼らの目は、「見えるもの」から離れて、「見えないもの」にそそがれた(コリント第二 4:18)。人性のよそおいの下に、彼らは神のみ子の栄光をみとめたのであった。……

ペテロが告白した真理は、信者の信仰の土台である。これこそキリストご自身が永遠のいのちであると宣言されたものである。だがこの知識を持っていることは、自己称賛の理由にはならなかった。それがペテロに示されたのは、彼に知恵や徳があったからではなかった。人間はひとりで神についての知識に到達することはできない。「それは天よりも高い、あなたは何をなしうるか。それは陰府(よみ)よりも深い、あなたは何を知りうるか」(ヨブ記 11:8)。「子たる身分を授ける霊」のみが、神について「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかった」深い事がらをわれわれに示すことができるのである(ローマ 8:15, コリント第一 2:9)。「そして、それを神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである」(コリント第一 2:10)。(各時代の希望中巻 177-180)

サタンの力のもとに

「イエスは振り向いて、ペテロに言われた、『サタンよ、引きさがれ。わたしの邪魔をする者だ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。』」(マタイ 16:23)

サタンは人間の魂と神との間にたえず割り込もうとしている。……ペテロに関するこの教訓を注意深く研究する必要がある。(手紙 65, 1894 年)

ペテロは、キリストの働きの中に十字架を見ることを望まなかった。ペテロのことばから受ける印象は、キリストがご自分に従う者たちに与えようと望んでおられる印象と正反対のものであった。そこで救い主は、これまでその口から聞かれたことのないほど激しい譴責のことばを語る気になられた。……

サタンは、イエスを落胆させて、その使命から引き離そうとしていたが、ペテロは、盲目的な愛情から、その試みを口に出していた。悪の君サタンがその考え方の張本人であった。衝動的な訴えの背後にはサタンのそそのかしがあった。……イエスは、ペテロの目を十字架に向けさせようと望まれたが、サタンは、ペテロが十字架を見ないように、その目を地上の榮譽にそそがせようとした。こうしてサタンは、ペテロを通して、もう一度イエスに試みをおしつけようとしていた。しかし救い主は見向きもされなかった。イエスの思いはご自分の弟子の上にあった。サタンは、この弟子の心が、彼のために受けられるキリストの屈辱のまぼろしに感動させられないように、ペテロと主の間にはいりこんでいた。キリストのみにことばは、ペテロに向かってではなく、ペテロをあがない主から引き離そうとしていた者に向かって語られたのであった。「サタンよ、引きさがれ」(マタイ 16:23)。わたしと、まちがっているわたしのしもべとの間にもうこれ以上はいってはいけない。わたしは、わたしの愛の奥義を彼に示すために、ペテロと直接に向かいあいたいのだ。

地上におけるキリストの道が苦悩と屈辱のうちにあるということは、ペテロにとってはずいぶん教訓であって、彼はそれを学ぶのに時間がかかった。この弟子は苦難の主とまじわることをちゅうちょした。しかし彼は、熱した炉の火の中であって、その祝福を学ぶのであった。ずっとのちになって、長年の重荷と働きで彼の元気なからだがまがったとき、彼はこう書いた。「愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試練を、何か思いがけないことが起ったかのように驚きあやしむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜ぶがよい。それは、キリストの栄光が現れる際に、よろこびにあふれるためである」(ペテロ第一 4:12, 13)。(各時代の希望中巻 185, 186)

11月3日

ペテロ教訓を学ぶ

「シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい。」(ルカ 22:31, 32)

大胆で、けんか好きで、自信が強く、敏感で、行動的で、ふくしゅうも早いと同時に人を許すことにも寛大であるといったようなペテロは、しばしば過失をくりかえし、その度に譴責を受けた。しかしまたキリストに対する彼の真心からの忠誠と献身は、同じようにはっきりと認められ、そして賞賛された。救い主は正しい愛をもって、忍耐強くこのせっかちな弟子を取り扱い、彼の自信をとり除き、けんそんと従順と信頼を教えようと努力された。しかし、彼が学んだのはこうした教訓の一部分にすぎなかった。……「あなたは …… わたしを知らないと言うだろとの警告が幾度もくりかえされた。ペテロの悲しい、主を愛する心は「主よ、わたしは獄にでも、また死に至るまでも、あなたとご一緒に行く覚悟です」という誓いの言葉となった。……

カヤパの邸宅の庭で、主を拒否したペテロが、救い主の愛とあわれみと悲しみに満ちたまなざしに、愛と忠誠心を目ざめさせられ、キリストの涙を流して祈られた園に走って行って、キリストの苦悶の血のしたたりにぬれた土に後悔の涙を注いだとき、—「わたしは …… あなたのために祈った。」……の救い主のみ言葉は、ペテロの魂をささえた。キリストは、ペテロの罪を、前もってご存じであったが、彼を絶望のうちに、うち捨てておかれなかったのである。ペテロにそそがれたイエスのまなざしに、あわれみではなくて譴責があったとしたら、そしてまたイエスがペテロの罪を前もって告げられたとき、希望の言葉を告げておかれなかったなら、ペテロはどんなに暗い気持ちに襲われたことであろう。……

キリストは、ペテロを苦悶に会わせないようにはできなかったが、しかし、ペテロをひとり苦しみの中に捨てては置かれなかった。キリストの愛は、人を失望させることも見捨てることもない愛である。

人は自ら罪の身であるにもかかわらず、他人の試練や過失に対しては、不親切な態度をとりがちである。われわれは、人の心を読むことも、他人の心の戦いや苦しみをすることもできない。愛のけん責、傷つけてもいやす打撃、希望を語る警告というものを、われわれは学ばなければならない。

ペテロの生まれ変わった一生は、神の愛の奇跡であった。それは、大教師イエスの足跡に従おうとするすべての人にとって、一生の教訓である。(教育 90-94)

甘い母親の懇願

「勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座についたのと同様である。」(黙示録 3:21)

ヤコブとヨハネは、キリストの王国で名誉ある最高の地位が与えられるようにと、母親から懇願してもらった。キリストが神の国の本質について繰り返し指導しておられたにもかかわらず、この若い弟子たちは、人々の願いに従って王座と王の力を獲得される方として、いまだにメシヤに希望を抱いていた。……

しかしイエスは答えられた、「あなたがたは、自分が何を求めているのか、わかっている。わたしの飲もうとしている杯を飲むことができるか。彼らは主の神秘的な言葉が試練と苦しみを指していることを思い出したが、なお、自信をもって「できます」と答えた。彼らは、主にふりかかろうとしていることをすべて共に受けることによって彼らの忠誠を証明すれば、最高の名誉だと思った。「確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになる。」イエスは、左右に二人の悪人を仲間とし、王座の代わりに十字架を前にして、こう言われたのである。ヤコブとヨハネは主の苦しみを共にすることになっていた。一人は剣による死がつかの間にやって来る運命にあった。またほかの一人は、弟子たちのだれよりも長く主に従って働き、非難され、迫害された。「しかし、わたしの右、左にすわらせることは、わたしのすることではなく、わたしの父によって備えられている人々だけに許されることである」と、イエスは続けられた。……

神の国ではえこひいきで地位は得られない。それは働いて得るものではなく、気まぐれにさづけられて受けるものでもない。それは品性の実である。王冠と王座は、達成された一つの状態のしるし、すなわち主イエス・キリストの恵みによって、自我を征服したしるしである。……

キリストの一番近くに立つ者は、キリストの自己犠牲的な愛の精神を最も深く感受した者である。それは、「高ぶらない、誇らない……自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない」愛である。すなわち主イエスを動かしたように、この弟子を動かして、人類の救いのためにすべてを与え、死にいたるまで生き、働き、犠牲を払う愛である。(患難から栄光へ下巻 244-246)

11月5日

愛された弟子

「わたしたちが神を愛するのは、神がまずわたしたちを愛して下さったからである。」(ヨハネ第一 4:19)

ヨハネは、ほかの使徒たちより、イエスがとりわけ「愛しておられた弟子」である(ヨハネ 20:2)。ヨハネはキリストとの友情を、最高にたのしく味わったように見える。たしかに彼は、救い主の信頼と愛のしるしを豊かに受けたのである。彼は、変貌の山でのキリストの栄光と、ゲッセマネでのキリストの苦悩を目撃することを許された三人のうちの一人であった。また、キリストが十字架にかけられた最後の苦しみの時に、キリストが母の世話をお託しになったのも、ほかならぬヨハネにであった。

ヨハネは、愛や同情や交友にあこがれる性質を持っていた。彼は、イエスのそば近くにおし進み、そのかたわらにすわり、イエスの胸にもたれかかった。花が太陽と露をもとめるように、彼は天来の光と生命を吸いこんだ。(教育 90)

キリストに対するヨハネの愛情の深さと熱烈さは、ヨハネに対するキリストの愛を引き起こしたのではなく、かえってヨハネに対するキリストの愛の結果生じたものである。ヨハネはイエスのようになりたいと望んだ。そして、キリストの愛の人間を変える感化力のもとに、彼は柔和で謙遜になった。自己はイエスの中に隠された。ヨハネは仲間たちのだれよりも、その不思議ないのちの力に服従した。……ヨハネは体験的な知識によって救い主を知った。主の教えが彼の魂に刻みつけられた。彼が救い主の恵みをあかしたとき、彼の単純な言葉は、全身に満ちた愛により雄弁になった。ヨハネは、キリストに抱いていた深い愛により、いつもキリストのそば近くにいたいと願った。救い主は十二人の弟子たちみんなを愛されたが、ヨハネの気持ちは最も受容性に富んでいた。彼は他のだれよりも若かった。そして、だれよりも、子供のような打ち解けた信頼からイエスに心を開いた。こうして彼はキリストと更に共鳴するようになり、彼を通して救い主の最も深い霊的教えが人々に伝えられた。……

ヨハネはほかの弟子たちにできなかった天の父の愛について語ることができた。彼は神の特質を自分の品性にあらわし、自分の魂の中で感じていた事を仲間に示した。……彼を変えた神聖な美しさが、キリストのような輝きをもって彼の顔から輝き出た。ヨハネは敬慕と愛を抱いて救い主を見つめているうちに、キリストに似た者となった。そしてキリストと交わることが彼の一つの望みとなり、ついには彼の性格のうちに主のご品性が反映するようになった。(患難から栄光へ下巻 247, 248)

対照的なヨハネとユダ

『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである。』
(ヨハネ第一 2:6)

弟子ヨハネの生涯に、真のきよめとは何かということが例示されている。キリストと親密に交わった数年間に、ヨハネはしばしば救い主から戒めと注意を受けた。そして彼はこうした叱責を受け入れた。聖なるかたのご品性が現されたとき、彼は自分の欠点を認め、その啓示によって謙遜にされた。……ヨハネが神のみの日常生活の中に力とやさしさ、威厳と柔和、強さと忍耐を見たとき、彼の心はただ、感嘆するばかりであった。彼は自分の憤慨しやすい、野心的な性質をキリストの形成する力にゆだねたので、天来の愛が彼のうちに働いて、品性を一変させたのである。

ヨハネの生涯において達成されたきよめと著しい対照を示して、仲間の弟子ユダの経験がある。……ヨハネは自分の欠点と真剣に戦ったが、ユダは良心を汚し、誘惑に負けて、悪の習慣を更にしっかりと身につけてしまった。……

ヨハネとユダは、キリストの弟子だと告白した人たちを代表している。この二人の弟子は、同じようにキリストの模範を学び、それに従う機会を持っていた。二人ともイエスと密接に交わり、主の教えを聞く特権を与えられていた。二人はそれぞれ性格に大きな欠点があったがまた、二人とも、性格を変える聖なる恵みに接することができた。しかし、一人が謙遜にイエスのことを学んでいる間に、もう一人はみことばを実行せずただ聞くだけであった。一人が日ごとに自己に死に、罪に勝利して、真理によってきよめられていたのに、他方は、恵みの変える力を拒み、利己的な願いにふけり、サタンのとりこにされた。

ヨハネの生涯に見られるような性格の変化は、常にキリストと交わっていたために与えられたものである。人にはそれぞれ性格に目立つ欠点があるかもしれない。しかしその人が、キリストの真の弟子になると、神の恵みの力により変えられ、きよめられるのである。彼は主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、崇拜する主と同じ姿に変えられていく。(患難から栄光へ下巻 260-262)

11月7日

金銭の奴隷

「時に、十二弟子のひとりイスカリオテのユダという者が、祭司長たちのところに行って言った、『彼をあなたがたに引き渡せば、いくらくださいますか』。すると、彼らは銀貨三十枚を彼に支払った。」(マタイ 26:14, 15)

ユダは生れつき金銭欲が強かったが、しかしかならずしもこのような行為をするほど墮落しきっていたわけではなかった。貪欲という悪い精神を育てたので、ついにはそれが彼の生活の支配力となっていた。富に対する愛着は、キリストに対する愛よりも比重が大きかった。一つの悪徳のとりことなることによって、彼はサタンに身をまかせ、どこまでも罪の深みに落ちこんで行ったのであった。……

ユダは弟子たちから非常に尊敬され、彼らに対して大きな影響力を持っていた。彼自身も自分の資格を高く評価し、兄弟たちが判断力においても能力においても自分よりずっと劣っているとみなしていた。この人たちは機会を見てそのチャンスを利用することのできない人たちだと、彼は考えた。見通しのきかないこんな人たちを指導者にしていたら教会は決して繁栄しないだろうと、考えた。ペテロは、衝動的で、前後の考えなく行動する人間だった。ヨハネは、キリストの口から出る真理を大事にしているが、ユダから見れば金のやりくりはへただった。マタイは、自分の受けた訓練から万事に正確でなければならないことを教えられていたので、正直という点に非常にやかましかった。そしてユダからみれば、彼はたえずキリストのみことばを瞑想し、それに心を奪われていたので、抜け目なく先のことまで考えなくてはならない事業をまかせることはできなかった。このようにユダは弟子たちを全部かぞえあげてみて、もし事務的な才能のある自分がいなかったら、教会はしばしば困難と混乱に陥るだろうとうぬぼれた。(各時代の希望下巻 215-217)

ユダの歴史には、神からとうとばれたかもしれない人生が不幸な結末を告げたことが示されている。もしユダが、エルサレムへの最後の旅に出る前に死んでいたら、彼は十二弟子の一人としてふさわしい人物とみられ、非常に惜しまれたであろう。彼の経歴の終りにあらわされたような特性がなかったなら、各世紀を通じて彼につきまとう嫌悪は存在しなかったであろう。しかし彼の性格が世に公表されたことには一つの目的があった。それは彼と同じように聖なる委託を裏切るすべての者に対する警告となるのであった。……

彼は、奴隷の値段の銀三十枚で、栄光の主を恥辱と死に売り渡した。(同上 215)

全ての者にある機会

「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである。」(マタイ 7:21)

キリストのために働く者であると称している人が、全部、真の弟子であるとはかぎらない。キリストの名を名のる者、キリストの働き人とされている人の中にさえも、品性がキリストを代表していない人がいる。……最後まで、よい麦の間には毒麦がまじっているのである。……

神は、あわれみと忍耐に富んでおられるから、強情な人、不真実な者をも忍耐強く忍ばれる。選ばれたキリストの使徒の中には裏切り者のユダがいた。今日、働き人の中に偽り者がいても、それに驚き、失望すべきではない。人の心を読まれるキリストが、彼が当然裏切り者になることがわかっていてさえ、耐えられたのであれば、わたしたちはどれほどの忍耐をもってまちがっている人々を忍ぶべきであろうか。

また最も欠点が多いように見える人でも全部がユダのようではなく、性急な、あわて者で、自信の強かったペテロは、ユダよりどれほど悪く思われたか知れないし、救い主に譴責された数も、はるかに多いくらいであった。しかしペテロの生涯はなんとと言う奉仕と犠牲の生涯であったろう。彼は神の恵みの力について、なんと言うりっぱなあかしをたてたことであろう。(ミストリー・オブ・ヒーリング 478,479)

キリストはユダと直情的なペテロにご自分とのつながりをもたせられた。しかしそれはユダが貪欲であり、ペテロの感情が激しかったからではなく、この二人が偉大な教師であるご自分に習って、無我で柔和な心のへりくだったご自分になることができるためであった。主はこの二人のうちに良い素質を見られた。ユダは財務能力があり、キリストが生活上のささいな事柄においても、あらゆる利己心や詐欺行為、強欲を譴責することによって与えておられた教訓を心に留めていたならば教会にとって価値のある者となっていたはずであった。(教会への証 4 巻 486)

教会内にクリスチャンの名に値しない人びとがいるからといって、世の人びとがキリスト教の真理を疑ってもよいという理由にはならない。また、クリスチャンもにせ兄弟がいるからといって失望すべきではない。初代教会はどうであったであろうか。アナニヤとサツピラは、弟子たちの仲間にはいつていたのである。魔術師のシモンもバプテスマを受けた。……イスカリオテのユダは、使徒の一人に数えられていた。あがない主は、魂を一人でも失うことを望まれないのである。イエスとユダとの経験は、かたくなな人間の性質をイエスがどれほど忍ばれたかを示すために記録されたものである。主は、わたしたちにも、ご自分と共に忍ぶことを命じておられる。(キリストの実物教訓 51)

11月9日

イエスだけが知っておられた

「たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわざである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろう。」(マタイ 26:24)

弟子たちはユダの意図について何も知らなかった。彼の秘密を見ぬくことがおできになったのはイエスだけだった。しかし主はユダを暴露されなかった。イエスは彼の魂を求めておられた。主は、滅ぶべき都エルサレムについて泣かれたときこの都に対して感じられたような重荷を、ユダに対して感じておられた。主は、どうしておまえをあきらめることができようと、心の中で泣いておられた。この迫る愛の力をユダは感じた。救い主がご自分の手で彼のよごれた足を洗い、手ぬぐいでふかれたとき、ユダの心はいまこの場で自分の罪を告白してしまうという衝動に何度もかられた。しかし彼はへりくだろうとしなかった。彼は悔い改めに対して心をかたくなにし、一瞬間おしのけられていたもとの衝動がふたび彼を支配した。ユダは、今度は、弟子たちの足を洗っておられるキリストの行為につまずいた。イエスがこんなに自らを低くされるのだったら、とてもイスラエルの王になれることはできないと彼は思った。現世の王国における世俗的榮譽に対するいっさいの希望が失われた。キリストに従うことからはやはり何の利益も得られないのだとユダは納得した。……彼は悪魔に占領されていたので、主を裏切ることによって、自分が同意した働きをやりとげようと決心した。(各時代の希望下巻 120)

裏切り者のユダがこの聖さんに出席していた。彼は、イエスの裂かれたからだに流された血の象徴を、イエスから受け取った。彼は、「わたしを記念するため、このように行いなさい」と言われたことばを聞いた。神の小羊イエスの目の前にすわりながら、この裏切り者は、自分自身の暗い意図について思いをめぐらし、陰うつな復讐の思いを心にいだいていた。(同上 132)

過越の晩餐の時に、イエスは反逆者の意図をばくろすることによってご自分の神性を証明された。イエスは、弟子たちにお仕えになったときに、やさしくユダもその中に加えられた。しかし最後の愛の訴えは無視された。その時ユダの問題は決定した。そしてイエスが洗っておやりになった足は、裏切り者の仕事へと出て行ったのである。(同上 221)

この一步がふみ出されるまでは、ユダは悔い改めの可能性を越えてはいなかった。しかし彼が主と仲間の弟子たちの前から立ち去ったとき、最後の決定がなされ、彼は境界線を越えた。(同上 134)

今日どれほど多くの人がユダのように自分たちの主を裏切っていることであろうか。(SDA バイブル・コメンタリ [E・G・ホワイト・コメント] 5 巻 1102)

信じるのが遅い生徒

「イエスは彼に言われた、『ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか。』」(ヨハネ 14:9)

使徒たちが分けられているグループの一つの最初に、ピリポの名前がある。彼は、イエスが「わたしについてきなさい」とはっきり命令をお与えになった最初の弟子であった。……ペテスダの出身だった。彼は、バプテスマのヨハネの教えを聞き、ヨハネがキリストを神の小羊として宣言するのを聞いた。ピリポは真理のまじめな探求者だったが、心に信じるのが遅かった。……キリストは、天からの声によって神のみ子として宣言されたのであったが、ピリポにとっては、彼は「ヨセフの子、ナザレのイエス」であった(ヨハネ 1:45)。また五千人に食物が与えられたとき、ピリポの信仰の足りなさがあらわれた。イエスが、「どこからパンを買って来て、この人々に食べさせようか」とおたずねになったのは、ピリポをためすためであった。……またキリストの十字架を前にした最後の時にも、ピリポのことばは、信仰をくじくようなことばであった。……三年間イエスといっしょにいたこの弟子は、このように心がにぶく、信仰が弱かった。(各時代の希望上巻 377, 378)

彼は、キリストが天父の姿かたちを現されるのを望んだが、神はすでにご自身をキリストの内に現しておられた。キリストは言われた。「わたしと共に歩き、わたしの言葉を聞き、五千人に食物を与え、らい病人を癒し、死人を生き返らせ、死んでその体が腐り始めていたラザロを死からよみがえらせた奇跡の数々を目にした後で、わたしを知らないなどということがあり得ようか。あなたは、わたしを通して父が行われる働きに、父の姿を認識できないのか」と。……人間は誰一人として神の外観を見ることができない。キリストだけが、人類に天父を表示することができるのである。(SDA パイブル・コメント [E・G・初作・コメント] 5 巻 1141, 1142)

ピリポの不信にくらべてよろこばしいのは、ナタナエルの子供のような信頼であった。彼は非常に熱心な性質の男で、目に見えない実体を信仰によってとらえていた。しかしピリポは、キリストの学校の生徒だったので、天来の教師イエスは、彼の不信と愚かさを忍耐強く忍ばれた。聖霊が弟子たちの上にそそがれたとき、ピリポは、天の命令に従って教師となった。彼は、自分が何について語っているかを知っていて、確信をもって教えたので聴衆を心服させた。(各時代の希望上巻 378)

敵の陣地で

「だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。」(コリント第一 10:12)

キリストはあの裏切りの夜、弟子たちに警告を発して、「あなたがたは皆、わたしにつまずくであろう」といわれたが、その時も、ペテロは「たとい、みんなの者がつまずいても、わたしはつまずきません」と確信にみちて言った(マルコ 14:27, 29)。ペテロは、自分の危険な状態を知らなかった。彼をおとし入れたのは自己過信であった。彼は、自分の力で誘惑に対抗できると思っていたけれども、わずか数時間後に試練がきたときに、ののしりと誓いのことばとともに主を拒んだのである。(キリストの実物教訓 132, 133)

ペテロは自分の正体を知られないようにくふうしていた。彼は無関心な風をよそおって、敵の陣地に身を置いたので、たちまち誘惑のとりこになった。もし主のために戦うように召されたのだったら、彼は勇敢な戦士だっただろう。しかし嘲笑の指が自分に向けられた時、彼は臆病者であることをばくろした。主のために活動的に戦うことにはしりごみしないのに、嘲笑に負けて信仰を否定する人が多い。避けねばならないものとまじわることによって、彼らは自分自身を誘惑の道に置く。彼らは誘惑するように敵を招いて、ほかの事情のもとでは決して罪を犯さないようなことを、言ったりしたりする。今日、苦難や非難を恐れて信仰を偽装するキリストの弟子は、法廷におけるペテロの場合のように、主をこぼむのである。(各時代の希望下巻 207)

ペテロは、にわたりの鳴く声を聞いて、キリストのことばを思い起こし、自分がなんということをしたかに恐れおののいて振り返って、主の方を見た。ちょうどその瞬間、キリストもペテロをご覧になった。そしてそのまなざしは悲痛な表情ではあったが、そこにペテロに対するあわれみと愛とが混じっていた。ペテロは、それをさとして外に出て激しく泣いた。彼の心をくだいたのはキリストのそのときの表情であった。ペテロはここで人生の転換期に立っていた。そして彼は心から罪を悲しんで悔い改めた。……こうして、ペテロの自己過信はうせた。彼は、二度と高慢なことばを口に出さなくなった。……

ペテロが倒れたのは、うぬぼれのためであった。そして、彼がまた立ち上がるようにしていただいたのは、悔い改めとへりくだった思いを持つことによってであった。このような経験が記録されているのを見て、悔い改める罪人はみな勇気づけられる。(キリストの実物教訓 133, 135)

ついに改心

「イエスは三度目に言われた、『ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか』。ペテロは『わたしを愛するか』とイエスが三度も言われたので、心をいためてイエスに言った、『主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています』。イエスは彼に言われた、『わたしの羊を養いなさい。』」（ヨハネ 21:17）

ペテロの場合、この心を探る質問が必要であった。我々の場合もそれが必要である。回復の働きは、悪の根に届いていない限り、徹底的になされることはない。何度も何度も芽が刈り取られるが、苦い根は、発芽して多くの人を汚すために残されてしまう。しかし神のご臨在という光の中

で、隠された悪の深みにまで届かなければならない。……

キリストが三度目に、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」と言われたとき、心を探るメスが魂の中心部に届いた。自己吟味のうちに砕かれたペテロは、「主よ、あなたはすべてをご存知です。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」と言って岩の上に落ちた。

これこそ、真理と正義を拒むことによって神を辱め、キリストのみ心を痛めたすべての魂が直面しなければならない働きである。もし試みられた魂が試みの過程に耐え、テストのもとで自我が生きかえって、苦痛を覚えたり傷ついたりしなければ、その心を探るメスは、魂が本当に自我に

死んで、神にあって生きていることを明示するのである。（SDA バイブル・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 5 巻 1152）

もし魂がつまずき倒れるならば二度と元の地位にもどれないと言う人がある。しかし、この場合は、そうではなかった。……ご自分の命を与えて救われた魂をペテロにゆだねてキリストはペテロを元の地位にもどされたことの最も強力な根拠とされた。ペテロは、羊だけでなく、小羊をも養うことを命じられた。それは、彼がこれまでゆだねられていたのよりは広く慎重を要する働きであった。（クリスチャン教育の基礎 235）

ペテロは今、キリストの言葉を理解するのに十分なほど謙遜になっていた。かつては落ち着きがなく、自慢好きで自信過剰であった弟子が、重ねて問いかけることをしなかった。彼は、心砕かれた者となっていた。彼は、自ら裏切った主に、全く従っていった。キリストが自分を拒まれなかったという思いは、ペテロにとっては光であり、慰めと祝福であった。彼は自らの選びで十字架に掛かることができると感じたが、その場合は逆さでなければならなかった。こうしてキリストの苦難に近い苦しみを味わった彼は、「人の子がその栄光の座につく時には」、キリストの栄光にもあずかるのである。（SDA バイブル・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 5 巻 1152）

11月13日

カヤパ

「あなたがたは衣服ではなく、心を裂け。あなたがたの神、主に帰れ。」(ヨエル 2:13 上句)

ユダヤ人の間では、友人が死ぬと衣を裂くのが慣習となっていたが、しかし祭司はこの慣習を守るべきではなかった。……祭司の着ているものはすべて完全できずのないものでなければならなかった。この美しい祭司服によって、大いなる本体であられるイエス・キリストのご品性が象徴されていた。衣服でも態度でも、ことばでも精神でも、神は完全なもののしか受け入れることがおできにならない。神は聖なるおかたであるから、その栄光と完全さが地上の奉仕に表わされねばならない。……有限な人間は、悔い改めた、謙遜な精神を表明することによって自分自身の心を裂くことができる。これを神は認めてくださる。しかし祭司の衣を裂いてはならなかった。祭司の衣を裂くことは天の事物の象徴を傷つけるからであつた。(各時代の希望下巻 203)

キリストがご自身を神の御子であると宣言された時、カヤパは恐怖にかられたかのように衣を裂いて、イスラエルの聖なるお方を冒流した。(SDA バイブル・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 5 巻 1104)

彼は主がしてはならないと命じておられたまさにそのことをしたのであつた。神の有罪判決を受けていながら、カヤパはキリストに不敬罪という判決を下したのである。……不敬罪に対する恐怖心を人々に印象づけるために彼が裂いた祭司の衣は悪に満ちた心をおおった。(同上 1105)

真の大祭司は墮落した見せかけばかりのカヤパとどれほどかけ離れておられたことであろうか。キリストはうわべだけの大祭司の前で、純潔で汚れに染まず、罪のしみもなく立ち、すべての人間の違法を悲しんでおられた。このお方はカヤパが見せかけのために自分の衣を裂いたけれども

その心には偽善があることを知りつつも、カヤパの罪すら負われた。キリストはご自分の衣は裂かなかつたけれども、その魂は裂かれた。肉体という衣は、人類の罪を負う方として十字架にかかられた時裂かれた。(同上)

今日クリスチャンであると主張する多くの人が、自分の心は和らげられもせず服従もしていないのに、外面的な悔い改めを示して自分の衣を裂く危険性がある。これが非常に多くの人がクリスチャン生涯で失敗する原因である。不正に対して外面的な悲しみは表わすが、彼らの悔い改めは悔いのない悔い改めではない。(同上 1104, 1105)

ピラト

「ピラトは手のつけようがなく、かえって暴動になりそうなを見て、水を取り、群衆の前で手を洗って言った、『この人の血について、わたしには責任がない。おまえたちが自分で始末をするがよい。』」(マタイ 27:24)

もし最初にピラトが断固とした態度をとって、無罪とわかった人間に有罪を宣告することを拒否したら、彼は、彼を一生しばりつけた悔恨と罪とがの致命的な鎖をたち切ることができたであろう。もし彼が正義についての自分の確信を実行していたら、ユダヤ人がつけあがって彼に命令するようなことはなかったであろう。キリストは死刑にされたであろうが、それでもその罪がピラトに着せられることはなかったであろう。しかしピラトは一步一步自分の良心を犯した。彼は、正義と公平をもって裁判することを言いのがれたので、いまや祭司たちと役人たちの手に陥ってほとんど無力になっている自分に気がついた。動揺と優柔不断が彼の破滅となった。(各時代の希望下巻 242)

恐れと自責の念で、ピラトは救い主を見た。上向きのおびたしい顔の波の中で、イエスのお顔だけが平和であった。イエスの頭のあたりにはやわらかな光が輝いているようにみえた。ピラトは、心の中で、この人は神だと言った。ピラトは、群衆の方をふり向いて断言した。わたしは彼の血に責任がない。おまえたちがこの人を引き取って十字架につけるがよい。だが……彼は正しい人間だぞ。きょうのこのしわざについては、彼が自分の父と主張している神が、わたしではなくおまえたちをさばかれるように。次にピラトは、イエスに言った。この行為についてわたしをゆるしていただきたい、わたしはあなたを救うことができない。……

ピラトはイエスを救いたいと望んだ。しかしそうすれば自分の地位と名誉を保つことができないことを彼は知った。この世の権力を失うより、彼は罪のない人間を犠牲にする方を選んだ。同様に、損失と苦難とをまぬかれるために原則を犠牲にする者がどんなに多いことだろう。良心と義務は一つの方向をさし示し、利己心はほかの方向をさし示す。……

ピラトは暴徒たちの要求に屈服した。彼は自分の地位を危険にさらすよりも、イエスを十字架につけるために、引きわたした。しかし彼の用心にもかかわらず、彼の恐れていたことがのちになって彼の身に起こった。彼は名誉をはぎとられてその高い地位から追われ、キリストの十字架ののちまもなく、悔恨と傷つけられた誇りに苦しみながら、自らのいのちをたった。このように、罪と妥協する者はみな悲哀と破滅だけしか得られないであろう。「人が見て自ら正しいとする道でも、その終りはついに死に至る道となるものがある」(箴言 14:12)。(同上 253, 254)

11月15日

十字架を負う者

「彼らがイエスをひいてゆく途中、シモンというクレネ人が郊外から出てきたのを捕えて十字架を負わせ、それをになってイエスのあとから行かせた。」(ルカ 23:26)

バラバのために用意していた十字架が引き出され、イエスの傷つき血の流れる肩にのせられた時、イエスはピラトの館の門を通って出ることがほとんどできないほどであった。この重荷を負ったイエスは失血と極度の疲労、また痛みから気を失って地に倒れた。イエスが意識を回復すると、

再び十字架が肩にのせられ、進んで行くよう強制された。イエスはこの重い荷をかついで、二、三步よろめきつつ歩いたが、地面に死んだように倒れてしまった。祭司も役人たちもこの苦しんでいる犠牲者に対して同情を感じてはいなかったが、これ以上拷問の道具をこのお方に運ばせるのは無理であると知り、処刑場まで十字架を運ぶほど謙遜な者を見つけるのに困惑した。(原稿日付末請 127)

カルバリーへと救い主についてきた群衆はこのお方が木の十字架を運ぶことができないからといって、このお方をあざけり、ののしった。彼らはみなキリストの弱々しいよろめき足どりを見ていたが、神の御子に対する毒舌と拷問を一步一步進めていった者の心に同情心はおこらなかった。……

通りすがりのクレネ人シモンは田舎からこの町へと向かっていたが、群衆のあざけりと口汚い言葉を聞き、「ユダヤの王のお通りだ」という軽蔑した言葉がくり返されているのを聞いた。彼はこの光景に驚いて立ち止まる。そして彼が言葉と行為に同情心を示すと、人々は彼を捕えて、キリストに背負わせるには重すぎる十字架を無理やりかつがせる。……彼がカルバリーまで背負っていった木の十字架はシモンがキリストの十字架を自らすすんで背負い、その重荷のもとに、永遠に喜んで立つ手段となった。カルバリーまでキリストの十字架を運び十字架の下での悲しく恐ろしい行為と見物人を見ることによるキリストとの強制的な交わりは、シモンの心をイエスへ引きよせる手段となった。キリストの唇から出た一つ一つの言葉が彼の魂に刻み込まれ、……シモンの心は信じた。(原稿 103, 1897 年)

わたしを思い出してください

「そして彼はイエスに言った『主よ、あなたがみ国に入られるときには、わたしを思い出してください』」(ルカ 23:42 英語訳)

十字架上で苦しんでおられるイエスにかすかな慰めの光が一すじさしてきた。それは悔い改めたどろぼうの祈りであった。……この男は常習犯ではなかった。彼は悪い仲間たちにさそわれて道をふみはずしたのであったが、十字架のそばに立って救い主をののしっている人たちの多くよりも罪が軽かった。彼はかつてイエスを見、イエスのことばを聞き、その教えによって自覚させられたが、祭司たちと役人たちのためにイエスから離れてしまった。彼は、罪の自覚をおしころそうとして、ますます罪の深みにとびこみ、ついに捕えられて犯罪者としてさばかれ、十字架の死を宣告されたのであった。法廷でも、カルバリーへの途中でも、彼はイエスといっしょだった。彼はピラトが、「この人になんの罪も見いだせない」と断言するのを聞いた(ヨハネ 19:4)。彼はイエスの神々しい態度に目をとめ、イエスが迫害者たちをあわれんでゆるされるのを見た。……これがキリストだという自覚が彼の心によみがえる。仲間のどろぼうに向かって、彼は、「おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか」と言う(ルカ 23:40)。瀕死のどろぼうたちは、もはや人間を恐れる気持は何もない。しかしその中のひとは、恐るべき神がおられることと、彼をおののかせる将来があることについて深い自覚が起こる。しかもいま、罪にけがれたままに彼の一生の経歴がとじられようとしている。……

有罪を宣告された時、このどろぼうは絶望し、自暴自棄になった。しかしいま、ふしぎな、やさしい思いがわきあがってくる。彼は……イエスについて聞いたことをみな心に思い起こす。彼は、イエスを信じて泣きながらついてきた人たちのことばを聞いた。彼は、救い主の頭上の罪状書きを見て読んだ。彼は、通りかかりの人たちが、ある者は悲しみにふるえる唇で、ある者はやじとあざけりをもってその罪状書きを読むのを聞いた。聖霊は彼の心を照らし、すこしずつ証拠の鎖がつながる。打たれ、あざけられ、十字架にかけられているイエスのうちに、彼は、世の罪をとり除く神の小羊を見る。死にかけている無力な魂が、瀕死の救い主に身をまかせると、彼の声には苦悩の中に望みがまじる。「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」と、彼は叫ぶ。すぐに応答があった。その調子はやわらかく、音楽のようで、そのことばは愛とあわれみと力に満ちていた。きょう、よく言うておくが、あなたはわたしと一緒にパラダイスにいるであろう。……神に受け入れられたという完全な平安が悔い改めたどろぼうにのぞんだ。(各時代の希望下巻 267-271)

11月17日

もはやひそかな友ではない

「そののち、ユダヤ人をはばかりて、ひそかにイエスの弟子となったアリマタヤのヨセフという人が、イエスの死体を取りおろしたいと、ピラトに願い出た。ピラトはそれを許したので、彼はイエスの死体を取りおろしに行った。また、前に、夜、イエスのみもとに行ったニコデモも、没薬と沈香とをまぜたものを百斤ほど持ってきた。」(ヨハネ 19:38,39)

ヨセフもニコデモも、救い主の在世中には、公然と主を受け入れなかった。もしそのようなことをすれば、サンヒドリンから除名されることがわかっていた。彼らは会議のときに自分たちの勢力によってイエスを守ろうと望んでいたのだった。しばらくはそれがうまくいっているようにみえた。しかし陰險な祭司たちは、キリストに対する彼らの好意をみて、その計画を妨害した。彼らがいないところで、イエスは有罪を宣告され、十字架につけるために引き渡された。キリストがなくなれたからには、彼らはもうキリストへの愛着をかくさなかった。弟子たちがキリストに従う者であることを公然と示すことを恐れたときに、ヨセフとニコデモは大胆に彼らを助けにやってきた。……

ニコデモは、イエスが十字架にあげられるのを見た時、オリブ山で夜語られたイエスのみことばを思い出した。「ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」(ヨハネ 3:14, 15)。キリストが墓に横たわっておられたその安息日に、ニコデモは反省の機会があった。いまもつとはっきりしたひとつの光が彼の思いを照らし、イエスが彼に語られたことばはもはや神秘的ではなかった。彼は、救い主の在世中に主と結合しなかったことによって多くのものを失ったことを感じた。いま彼はカルバリーの出来事を思い起こした。殺人者たちのためのキリストの祈りと、死にかけているどろぼうの嘆願に対するキリストの答が、学識のあるこの議員の心に語りかけた。ふたたび彼は苦悶のうちにあられる救い主を見あげた。ふたたび彼は、勝利者のことばのように語られたあの「すべてが終った」という最後の叫びを聞いた。ふたたび彼は揺れる大地と、暗くなった空と、裂けた幕と、ふるえる岩を見、彼の信仰は永久に定まった。弟子たちの望みを滅ぼしたその出来事が、ヨセフとニコデモにイエスの神性を確信させた。彼らの恐れは、固い、ゆるがない信仰の勇気によって征服された。(各時代の希望 下巻 300-304)

疑うトマス

「イエスは彼に言われた、『あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである』。(ヨハネ 20:29)

イエスが(よみがえった後)初めて弟子たちに二階の広間で会われたとき、トマスはいっしょにいなかった。トマスはほかの人たちのうわさを聞き、イエスがよみがえられたという十分な証拠を示されたが、憂うつと不信が彼の心を満たしていた。……彼は信じないことを決心した。そして、一週の間じゅう自分のみじめさを思いつづけた。それは、兄弟たちの望みと信仰とは対照的にいっそう暗くみえた。……彼は熱烈に主を愛していたが、彼の心と思いはねたみと不信に占領されていた。(各時代の希望下巻 345)

(彼は)自分の指をイエスの手の釘あとに、自分の手を残酷な槍につきさされたイエスのわき腹にさしこんでみるまでは信じないと、自信に満ちてきっぱりと断言した。……

イエスがふたたび弟子たちにあらわれた時、トマスもそこにいた。……そしてイエスはトマスの希望通りの証拠をお与えになった。(初代文集 318)

彼の心はよろこびでおどった。彼はイエスの足下に身を投げて、「わが主よ、わが神よ」と叫んだ。イエスは、彼が主を認めたことを受け入れられたが、やさしく彼の不信を譴責された。……トマスのように、疑いの原因が全部のぞかれるのを待っている人々の多くは、その願いが決して実現されないであろう。彼らの不信はだんだん固まってしまうのである。……

トマスのとり扱いにおいて、イエスは弟子たちに一つの教訓をお与えになった。イエスの模範は、信仰が弱くて、疑いをはっきり示す人々をどのように扱わねばならないかを教えている。イエスはトマスをしかりつけて、おさえつけてしまったり、彼と議論したりなどなさらなかった。イエスは疑う者にご自身をお示しになった。トマスは、不当にも自分の信仰の条件を規定したが、イエスは、その寛大な愛と思いやりによって、すべての障壁を打破された。不信は、議論によってはめつたに征服されない。……しかしイエスが、十字架につけられた救い主として、その愛とあわれみのうちにあらわされるとき、かつては固かった多くの口から、「わが主よ、わが神よ」とのトマスの告白が聞かれるであろう。(各時代の希望下巻 346, 348)

宗教の自由

「ペテロとヨハネとは、これに対して言った、『神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい。わたしたちとしては、自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない。』」(使徒行伝 4:19, 20)

足なえをいやした翌日、アンナスとカヤパは、その他の宮の高位聖職者たちと共に、裁判のために集まった。ふたりの囚人たちが彼らの前に連れてこられた。その同じ部屋で、何人か同じ顔ぶれの人たちの前で、ペテロは以前に、恥知らずにも自分の主を拒んだのであった。ペテロは、今、自分が裁かれるために出頭して、この事をはっきりと思い出した。ペテロにとっては今こそ、自分の臆病を償う時であった。……

しかし、キリストが最も苦しんでおられた時に、主を拒んだペテロは、衝動的で、自信家であったが、取り調べを受けるためにサンヒドリンに連れて来られたペテロは、以前のペテロとは違っていた。彼は、つまずいて以来、改心していた。彼はもはや誇らず、高慢にならず、謙遜で、自己に頼らない者になっていた。ペテロは聖霊に満たされ、聖霊の力によって、一度捨てたみ名をあがめ、自分の背信の汚点を取り除く決意であった。(患難から栄光へ上巻 60, 61)

イエスの名をこれ以上語ってはならないという命令に対して、「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい」と答えて、弟子たちは恐れなくその主義に立った。これは宗教改革の時代に、福音を信じる者たちが戦い抜いて守ったものと同じである。……

今日、われわれはこの原則を確固として支持しなければならない。その時以来、幾世紀にわたり、福音教会の創設者や神の証人たちが高くかかげてきた真理と宗教の自由の旗は、この最後の争闘においてわれわれの手にゆだねられている。……われわれは人間の政府を神が定められたものとして認め、合法的な範囲内でそれに従うことを、聖なる義務として教えなければならない。しかし、その要求が神のご要求と矛盾するときは、人間よりむしろ神に従わねばならない。神のみことばをすべての人間の法律にまさるものとして認めねばならない。「教会がこう言う」、あるいは「国がこう言う」ということのために、「主がこう言われる」ということを放棄してはならない。キリストの王冠は、この世の主権者の王冠より高くかかげられねばならない。(同上 67-69)

神の賜物の誤用

「あなたの神、主に誓願をかける時、それを果すことを怠ってはならない。あなたの神、主は必ずそれをあなたに求められるからである。それを怠るときは罪を得るであろう。」(申命記 23:21)

アナニヤとサツピラの短いけれども恐ろしい経歴は、キリストに従っていると公言するすべての者の益のために、靈感の筆によって記された。この重要な教訓が神の民の心に重んじられていない……神の応報の判決についてのこの著しい証拠は恐るべきものであり、すべての者を、そのような罰をもたらす罪を繰り返すことに対して恐れおののくよう導かねばならない。……

アナニヤとサツピラは使徒たちが説教した福音を聞く特権にあずかっていた。……神のみ霊による直接の感化のもとに、この二人はある土地を主に捧げると誓っていた。しかし彼らが天来の感化のもとに身を置かなくなった時、感銘は力を失い、自分たちがなした誓約を果たすことに疑問を投げかけ、身を引き始めた。……まず貪欲を大切にし、次に自分たちが神の捧げると厳粛に誓っていたことをこの利己的な魂が惜しんでいることを、兄弟たちに知られるのを恥ずかしいと思い、欺いたのであった。……彼らの欺瞞に対して有罪が宣告された時、その罰は即座の死であった。(教会への証 4 巻 462, 463)

神が貪欲や詐欺や偽善を憎むことを示されたこの事例は、初代の教会ばかりでなく、後につくすすべての時代に対して与えられた危険信号であった。……聖霊の感化を受けて、ある金額をささげる誓いを立てたら、誓った者はもはやささげた部分に対する権利を持たない。人に対するこのような種類の約束は、義務と見なされるであろう。ましてや神に対する約束は義務以上のものとならないだろうか。……

多くの人々は自分を満足させるためには惜しみなく金銭を使う。男も女も自分の都合を考えて、自分たちの好みを満たしているが、神へのささげものは、しぶしぶと、切りつめて持ってくる。彼らは神の財産が使用された明細書を神がいずれ要求されることや、神がアナニヤやサツピラのささげものをお受けにならなかったように、彼らが倉に携えてきたわずかなものをお受けにならないことを忘れている。(患難から栄光へ上巻 74, 76)

11月21日

キリストのために殉教

「議会で席についていた人たちは皆、ステパノに目を注いだが、彼の顔は、ちょうど天使の顔のように見えた。」(使徒行伝 6:15)

ステパノは七人の執事のうち第一のものであって、信心深く、幅の広い信仰をもった人であった。彼はユダヤ人であったが、ギリシャ語を話し、ギリシャ人の習慣や風習をよく知っていた。そこで彼は、ギリシャ系ユダヤ人の会堂で福音を宣べ伝える機会を見いだした。ステパノは実に活発にキリストのみわざのために働いて、大胆に信仰を表明した。博学なラビや律法学者たちは容易に勝利できるとうぬぼれて、人々の前で彼と議論した。しかし「彼は知恵と御霊とで語っていたので、それに対抗できなかった。」……

ステパノの説教に伴う力を見た祭司や役人たちは、激しい憎悪の念でいっぱいになった。……

(彼らは)ステパノを捕らえてサンヒドリンの前に引き出し審問にかけた。……

タルソのサウロもその場において、先頭に立ってステパノに反対した。彼はその事件を扱うのに、力強い雄弁とラビの論理を用い、ステパノは人心を惑わす危険千万な教えを説いていると民衆に思わせた。しかしサウロは、他の国々に福音をひろめるといふ神の目的を、十分に理解している人以外に、ステパノの中に何も見いださなかった。……

ステパノは彼らの残忍な顔を見て、自分の運命を悟ったが、少しもたじろがなかった。死の恐怖は彼から去っていた。彼は怒り狂った祭司も気の立った暴徒も恐ろしくなかった。目の前の光景は見えなくなり、そのかわりに天の門が開かれていて、神の宮廷の栄光と、み座から立ち上がって、ご自分のしもべをささえようとしておられるキリストが見えた。(患難から栄光へ上巻 100-104)

どの時代にも神が選ばれた使者たちは、ののしられ、迫害された。しかしその苦難を通して神の知識が広まったのである。……かの高貴で雄弁なステパノが……石で打ち殺された時、福音事業は何らの損失もこうむらなかつた。ステパノの顔に輝いた天の光と彼の臨終の時の祈りに聞かれた神のようなあわれみなどは、そこに立っていた頑迷な一議員の罪を指摘する鋭い矢のようなものであった。こうして迫害者のパリサイ人サウロは、異邦人や、王たちやイスラエルの子らにキリストの名をもたらし選びの器となったのである。(祝福の山 41, 42)

ただ一人のために

「しかし、主の使がピリポにむかって言った、『立って南方に行き、エルサレムからガザへ下る道に出なさい』（このガザは、今は荒れはてている）。そこで、彼は立って出かけた。」（使徒行伝 8:26, 27）

たった一人のエチオピア人のために、どれほど多くの努力がなされたかに注目しなさい。（教会への証 8 巻 57）

このエチオピア人は名声の高い、有力な人であった。神は、彼が改心したら、自分の受けた光を人に分かち、福音のために大きな感化を及ぼすことをごぞんじであった。神の天使たちが、光を求めるこの求道者に付き添っていたので、彼は救い主へ引きよせられていった。聖霊の働きにより、神はこのエチオピア人を、光へ導くことのできる人と接するよう導かれた。

ピリポはエチオピア人のところに行つて、彼が読んでいる預言を説明してやるように命じられた。「進み寄つて、あの馬車に並んで行きなさい」とみ霊が言った。

.....

聖書の説明が進むにつれて、宦官の心にますます興味がわいてきて、ピリポが話し終わつたときには、宦官は与えられた真理を受け入れる気持ちになっていた。彼は自分の社会的な高い地位を理由に、福音を拒むようなことはしなかった。

.....

このエチオピア人は、ピリポのような伝道者たち、すなわち神のみ声を聞いて、神からつかかわされるところに行く人たちから、教えを受ける必要のある部類の人々を代表している。聖書を読んでも、その真の意味がわからないでいる者が多い。世界中の男女は何かを求めて天を仰いでいる。光と恵みと聖霊を求める魂から、祈りと涙とねぎごとが天にのぼっていく。多くのものは、み国の入口に立って、刈り集められるのを待つばかりになっているのである。光を求め、福音を受け入れる準備のできた人のところに、ひとりの天使がピリポを導いた。今日も天使たちは、聖霊に舌をきよめていただき、心を純化し高めていただく働き人の歩みを導くのである。（患難から栄光へ上巻 112-114）

ピリポをエチオピアの役人につかわされ、ペテロをローマの百卒長に、また幼いイスラエルの娘をシリヤの大將ナアマンを助けるために送られた神は、今日、青年男女を自分の代表者として神の助けや指導を必要とする人々へつかかわされるのである。（ミストリー・オブ・ヒーリング 457）

最初のドルカス

「ヨッパにタビタ（これを訳すと、ドルカス、すなわち、かもしか）という女弟子がいた。数々のよい働きや施しをしていた婦人であった。」（使徒行伝 9:36）

ルダの近くのヨッパにドルカスという名前の婦人が住んでいた。彼女はよい働きをして、人々から非常に愛されていた。彼女はイエスのりっぱな弟子で、かずかずの親切なことを行いながら暮らしていた。また、だれに心地よい衣服が必要であるか、だれに同情が必要であるかを知っていて、貧しい者や悲しむ者のために惜しみなく尽くしていた。……

「ところが、そのころ病気になるって死んだ。」……ペテロがルダにいることを聞いた信者たちは彼に使いをやり、『どうぞ、早くこちらにおいで下さい』と頼んだ。そこでペテロは立って、ふたりの者に連れられてきた。彼が着くとすぐ、屋上の間に案内された。すると、やもめたちがみんな彼のそばに寄ってきて、ドルカスが生前つくった下着や上着の数々を、泣きながら見せるのであった。」……

使徒ペテロは彼らの悲しみを見て同情し、心を動かされた。それから彼は嘆き悲しんでいる友人たちを部屋から出させるように命じ、ひざまずいてドルカスの命と健康が取りもどされるように、神に熱心に祈った。……ドルカスは教会にとって有益な奉仕をしていたので、神は彼女を敵の地から導きかえすことが必要だと思われた。その器用な手先と精力をなお他人を恵むために用いさせ、またこの神のみ力の現れによって、キリストのみわざが強められるようになるためであった。（患難から栄光へ上巻 140, 141）

青少年たちは、神が日々の勤労者の働きをどんなにとうとんでおいでになるかを、聖書から学ぶ必要がある。……

大工としてのイエスや天幕製造業者としてのパウロが、職人としての勤労と最高の任務を、すなわち人間的なものと神的なものとを結合したことを読んでいた。救い主のふしぎな奇跡によって、少年の持っていた五つのパンで群衆が養われたことや、裁縫師ドルカスが死よりよみがえらせられて、貧しい人々のために衣服をつくる働きを続けたことや、箴言の中に描かれている賢い婦人すなわち「羊の毛や亜麻を求めて、手ずから望みのように、それを仕上げ」……「手を貧しい者に開き、乏しい人に手をさしのべ」「家の事をよくかえりみ、怠りのかてを食べることをしない」婦人について書かれていることを読んでいただきたい。こういう人々について、神は、「その手の働きの実を彼女に与え、その行いのために彼女を町の門でほめたたえよ」と仰せになっている。（教育 257, 258）

人種差別はない

「彼は御使を見つめていたが、恐ろしくなって、『主よ、なんでございますか』と言った。すると御使が言った、『あなたの祈や施しは神のみ前にとどいて、おぼえられている。ついては今、ヨッパに人をやって、ペテロと呼ばれるシモンという人を招きなさい。この人は、海べに家をもつ皮なめしシモンという者の客となっている』。」
(使徒行伝 10:4-6)

これらの命令の明白なこと、また、ペテロが宿っている家の人の職業まであげられていることを見ると、どんな身分の人々の一生も仕事も天には知られていることがわかる。神は王の経験や働きを知っておられるだけでなく、身分の低い労働者のこともごぞんじなのである。(患難から栄光へ上巻 143)

主がコルネリオに表わされた関心について読んだ時、わたしの心は非常に優しくなった。コルネリオはローマ軍の将校という高い地位の人であったが、自分が受け入れたすべての光に従って厳格に歩んでいた。主は天から彼に特別のメッセージを送り、一方ではペテロにこの人を訪問し、光を与えるようにと直接指示された。(教会への証 6 巻 79)

コルネリオは幻によるこんで従った。……

こうして福音は異邦人や外国の人々に伝えられ、彼らは聖徒と同じ市民になり、神の家族の中に加えられた。コルネリオとその家族の者たちの改宗は、これから集められる収穫の初穂にほかならなかった。これがきっかけとなり、神の恵みの働きは異教の町に広くひろめられた。今日、神は身分の低い者だけでなく、身分の高い者の中からも魂を求めておられる。コルネリオのように、主がみわざに携わせたいと思っておられる人々がこの世に大勢いる。彼らの心は神の民と共感しながら、なお、彼らが世と結ばれているきずなも固いのである。彼らがキリストの側に立つためには道徳的な勇気が必要である。これらの魂にとっては、特別な努力が払われなければならない。彼らは責任や交際のために大きな危険にさらされているからである。(患難から栄光へ上巻 145, 150, 151)

わたしたちはコルネリオについての話から、導かれたいと思っている者をみな神が導かれることを学ぶ。神はコルネリオを導かれた。祈りの中でご自分の僕の心を開き出された。神は、コルネリオがご自分の真理についての光を受け入れるよう準備をし、すでに上からの光を受けている人間を通してコルネリオの心を啓発しようと望まれた。(天国で 322)

11月25日

全世界に

「そこでペテロは口を開いて言った、『神は人をかたよりみないかたで。』」(使徒行伝 10:34)

ペテロは……コルネリオに福音を伝えるようにという神の召しを受けた。……

当時まだ弟子たちはだれも、異邦人に福音を伝えていなかった。彼らの心の中には、キリストの死によって取り除かれたはずの隔ての中垣が、今もなお存在していて、彼らの働きはユダヤ人たちにだけしか向けられていなかった。彼らは、異邦人は福音の祝福にあずかることはないと思っていたからである。神は今、ご自分の計画を世界的にひろめるように、ペテロに教えておられた。……ユダヤ人の教育を受けたために、ペテロの心にしっかり固着していた異邦人に対する偏見を取り去るために、主はいかに慎重に働きかけられたことであろう。布とその中身の幻によって、神は使徒の心にあるこの偏見を脱ぎすてさせ、天国では人を差別待遇することはなく、ユダヤ人も異邦人も神の御目にはひとしく尊いものであり、キリストを通して、異教徒も福音の祝福と特権にあずかることができるということを教えようとされた。……

ペテロにとってこれは苦しい命令だったので、その役目を引き受けるには一足ごとに足が重くなるばかりであったが、彼は拒もうとしなかった。……ペテロは集まっている人々に、イエスが罪人の唯一の望みであると語っているあいだに、彼の見た幻の意味が自分自身に更によくわかるようになった。そして彼が紹介している真理への熱情で心が燃えた。……

ユダヤにいる兄弟たちは、ペテロが異邦人の家に行って、集まった人々に福音を宣べ伝えたことを聞くと驚き、また憤った。そして僭越としか思われたいそうしたやりかたは、かえって彼自身の教えを妨げる結果になるのではないかと彼らは恐れた。……

ペテロは事の次第を残らず彼らに明かした。……ペテロのとった方法は、神のご計画をそのまま実行したものであり、自分たちの偏見や排他的な気持ちは福音の精神に全く反するものであることをさとして、彼らは神をさんびし、「それでは神は、異邦人にも命にいたる悔改めをお与えになったのだ」と言った。(患難から栄光へ上巻 141-153)

守護のみ使い

「その時ペテロはわれにかえって言った、『今はじめて、ほんとうのことがわかった。主が御使をつかわして、ヘロデの手から、またユダヤ人たちの待ちもうけていたあらゆる災から、わたしを救い出して下さったのだ。』」(使徒行伝 12:11)

ついにペテロの処刑の日が決まったが、信者たちの祈りはなお天にのぼっていた。彼らが精力と同情の気持ちを注ぎつくして熱心に助けを祈り求めている時、神のみ使いたちは投獄されている使徒を見守っていた。……

ヘロデは……今度は用心に用心をした。どうみても救われる可能性がないように、ペテロは十六人の兵卒に夜昼寝ずの番で監視された。また獄房では二本の鎖につながれてふたりの兵卒の間におかれ、その鎖はそれぞれ兵卒の手首に結びつけてあった。ペテロが少しでも動けば必ず彼らに気づかれた。獄の戸口の錠は厳重におろされ、屈強な番兵が見張りをしているために、人間がどう手をくだしても全然助けるすべも、逃げるすべもなかった。しかし人間の窮地は神の好機である。……ヘロデは全能の神に逆らって手をあげていたが、全く敗北する。神はその偉大な力を発揮されて、ユダヤ人が滅ぼそうとたくらんでいた尊い命を、まさに救おうとしておられた。……ペテロを助けるために力強い天使がひとり送られる。(患難から栄光へ上巻 156, 157)

天の支配者や権威者たちは、神のしもべたちが、見たところ思わしくない状況のもとでつづけている戦いを見守っている。クリスチャンが救い主のみ旗のもとにはせ参じ、信仰の戦いをりっぱに戦いぬくとき、新しい勝利が遂げられ、新しい名誉が勝ちとられているのである。天使たちはみな神のつつましい信徒たちに仕えている。この地上で神の働き人の軍がさんびの歌をうたうと、天の聖歌隊も彼らに合わせて神とそのみ子にさんびをささげる。……

真実の神の子らはみな、天使たちの協力を受けていることを忘れずにいるがよい。目には見えないが、光と力の軍隊は、神を信じ、神の約束を求める柔和で謙遜な者たちにつきそっているのである。ケルビムやセラピムや力にぬきんでた天使たちが神の右手に立っているが、「すべて仕える霊であって、救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされたもの」たちである。(同上 164, 165)

11月27日

天とのつながり

「主の使は主を恐れる者のまわりに陣をしいて彼らを助けられる。」(詩篇 34:7)

天使に命じられたところに行って、真理を求めいてる一人の人に会ったピリポの経験、神からのメッセージをもった天使の訪問を受けたコルネリオの経験、投獄され死刑の宣告を受けながらも無事に天使に助けられたペテロの経験、どの経験もみな、天地間のつながりの密接なことを物語っている。

こうした天使のおとずれの記録は、神の働き人に力と励ましを与えるにちがいない。今日、使徒時代と全く同じように、天の使者たちは地上くまなくおとずれ、悲しむ者を慰め、罪びとを守り、人々の心をキリストに導いている。われわれは天使たちを見ることはできないが、彼らはわれわれと共にいて導き、守り、行く手を示しているのである。

天はその神秘的なはしごにより、地へと近づけられている。その土台は地に固くすえられ、その頂点は神のみ座にまで達している。天使たちはその明るく輝くはしごを絶えず上ったり下ったりして、求める者、苦しみ悩む者の祈りを神のみもとに携え行き、祝福と希望、勇気と助けを人の子らに運んでくる。これら光の天使たちは人の周囲に天の雰囲気をつくり、われわれを目には見えないもの、永遠のものへと向けさせる。われわれは生まれながらの視力でその姿を見ることはできないが、霊的な幻によって天の事を認識できる。霊的な耳だけが天の調和ある声を聞くことができるのである。……

神は選ばれた者たちを惨禍から救い、「暗やみに歩きまわる疫病」や「真昼に荒す滅び」から彼らを守るよう天使たちを任命されている。

天使たちは、人が友と語り合うようにくり返し人々と語り合い、彼らを安全な場所へ導いてきた。天使たちの励ましの言葉は、幾たびとなく信仰者の打ちしおれた精神を生きかえらせ、彼らの心を高く、地よりも上にあるものへと向けさせ、勝利者が偉大な白い御座を囲むときに受ける白い衣、冠、勝利のしゅろの枝を信仰によって見上げさせてきた。(患難から栄光へ上巻 163, 164)

ダマスコの門外で

「ところが、道を急いでダマスコの近くにきたとき、突然、天から光がさして、彼をめぐり照した。彼は地に倒れたが、その時『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか』と呼びかける声を聞いた。」(使徒行伝 9:3, 4)

福音の働きにおいて、イエスに従ったガリラヤの弟子たちの信仰と経験に、エルサレムの一学者のたくましい精力と知的な能力が結合された。タルソのサウロはローマの一市民として異邦の都市に生まれ、血統によるばかりでなく長年の訓練と愛国的な献身と宗教的な信念とにおいてユダヤ人であり、エルサレムにおいて最もすぐれた学者の門下で教育をうけ、父祖伝来の律法と慣習について教えられていた。彼は、ユダヤ国民としての誇りと偏見を最大限に持っていた。彼は、若いうちにサンヒドリンのほまれ高い議員となり、古来の伝統的な宗教の熱心な擁護者として、前途を期待されていた。ユダヤの神学校では、神のみ言葉よりも、人間的な思索が重んじられ、学者たちの解釈や慣習によって、神のみ言葉から力が奪われていた。……彼らは、ローマの圧制者たちに激しい憎悪を持ち、武力に訴えて、国家の主権を回復する決意をいいていた。彼らは、自分たちの野心的な陰謀とはおよそ正反対な平和の使命を叫ぶイエスの弟子たちを憎みそして殺した。サウロは中でも最も残忍で冷酷な迫害者のひとりであった。……

ダマスコ門外でパウロの見た十字架のイエスの異象は彼の全生活を一変させた。迫害者が弟子となり、教師が生徒となった。ダマスコで孤独の中に送った暗黒の幾日間は、彼の幾年もの経験に匹敵した。彼はキリストを教師として、記憶にたくわえられていた旧約聖書を学んだ。(教育 62, 63)

パウロはパリサイ主義を捨てて、イエス・キリストの福音と取り替えた時、真の犠牲は何も払わなかった。……自分が間違った道にいることに気づいた時、パウロは天来の光に従って、自分が地上から抹殺しようと思っていた人々と結びついていた。……彼はキリストを教え、キリストを生き、キリストのために殉教した。(原稿 41, 1894 年)

11月29日

サウロからパウロへ

「そこで彼は震えながら驚いて『主よ、あなたはわたしに何をおさせになりたいのですか』と尋ねた。すると主は『立って、町に入っていきなさい。そこであなたのなすべきことが告げられるであろう』と彼に言われた。」(使徒行伝 9:6 英語訳)

パウロの素晴らしい改心の中に、わたしたちは神の驚くべきみ力を見る。……他の誰にもましてパウロがその名を憎み軽蔑していたお方、イエスはパウロの荒れ狂ってはいるが正直な行動を止めるという目的のためにご自身を彼にあらわされた。そしてそれはまた異邦人へ福音をもたらすために、この最も見込みのなさそうな道具を選ばれた器としたいためであった。……天来の輝く光がパウロの視力を取り去ってしまった。だが、めしいを癒された偉大な方イエスは、パウロの視力を回復なさらない。このお方は、パウロの質問に答えて、「立って、町にはいっていきなさい。そうすればそこであなたのなすべきことが告げられるであろう」と仰せになる。イエスはパウロの失明を癒すことができるばかりでなく、彼の罪を許し、将来進むべき道を示してパウロにその義務を伝えることもおできになった。すべての力と憐みはキリストから流れ出ている。しかしこのお方は、真理への改心にあたって、パウロに、地上に最近できたばかりの神の教会に依存しない経験をおさせにならなかった。

この出来事でパウロに与えられた驚くべき光は彼を驚かせ当惑させた。彼は完全に屈服させられた。人間はこの分野についての働きをパウロのためにすることはできなかったが、キリストの僕が成し遂げることのできる働きがまだあった。イエスはパウロに、これから先の義務を知るために、教会におけるキリストの代表者に会うようにと命じられた。このようにして、キリストはご自分が組織された教会に権威と支持をお与えになる。キリストは啓示と罪の自覚をうながす働きをされたので、パウロは今、神が真理を教えるようにと命じられた人々から学ぶ状態に達していた。キリストはご自分が選ばれた僕のところへ行くようにとパウロに指示し、このようにして彼をご自分の教会に結びつけられた。パウロが断ち滅ぼそうとしていたその人々が、軽蔑し、迫害していたまさにその宗教についての教師とならねばならなかった。……

天使がアナニヤに送られ、サウロが、次に自分が何をすべきかについて教えるを受けるために祈っていたある家へ行くようにと、アナニヤに命じる。……アナニヤはキリストの代わりにサウロの目にさわり、視力が回復する。アナニヤはキリストの代わりにサウロに手を置き、キリストのみ名によって祈り、サウロは聖霊を受ける。(教会への証 3 巻 429-433)

準備の場所アラビヤ

「また先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビヤに出て行った。それから再びダマスコに帰った。」(ガラテヤ 1:17)

パウロの生命は危くなった。彼は一時ダマスコから離れるようにとの命令を神から受けた。彼はアラビヤに行き、割合に人里離れたそこで神とまじわり、考えにふける十分な機会をもった。彼は神とともにひとりで、おのが心をさぐり、悔い改めを深め、着手するにはあまりにも重大すぎるように思われる働きにたずさわるために、祈りと研究をもって準備したかった。彼は人々からえらばれたのではなく、神からえらばれた使徒だった。彼は、異邦人の間に働くべきであることがはっきり示されていた。アラビヤにいる間、彼は使徒たちと往来しなかった。彼は自分の悔い改めが受け入れられ、自分の大罪が許されたとの確信が得られるまでは安心しないとの決意をもって、あらんかぎりの心をこめて熱心に神をもとめた。彼はきたるべき自分の奉仕にイエスがともにいてくださるという確信がもてるまでは、心の戦いをやめなかった。彼はキリストの栄光の跡をたえず身に負うことになった。それは天来の光によって盲にされた彼の目にあった。彼はまた、キリストの恩恵の支持についてたえず確信を持っていた。パウロは天の神との密接な関係に入った。イエスは彼とまじわり、彼の信仰を堅くし、知恵と恩恵をおあたえになった。(生き残る人々 315)

神に訓練されている者はすべて自分自身の心や自然や神とまじわる静かな時が必要である。彼らはこの世やその習慣や行動と調和しない生活をなすべきであって、神のみ旨を知るには個人的な経験が必要とする。わたしたちは各自その心に、神がお語りになっているのをきかねばならない。他のすべての声が静まって神の前でわたしたちが静かに待つとき、心の静けさは神のみ声をいっそう明りように聞えさせてくれる。……こうして心を新たにした者は、忙しい人々の間にあってもまた、人生のはげしい活動の中にあっても、光と平安の雰囲気にかこまれる。そうして体力も精神力も、新たな力を増し加えられる。その生活はよいかおりを放ち、人々の心を感動させる神の力を表わすのである。(ミストリー・オブ・ヒーリング 33)

研究 10

わたしたちが信仰の一致に到達するまで



聖霊によって何を悟ったか

信仰の一致と主を知る知識に到達させるのは、聖霊による一致であることを見てきました。聖霊の実である愛が、教会を一つの体として建てさせます。弟子たちはこの聖霊の約束を受けると共に、それを求めるように命じられました。そして、たしかに初期教会は、その約束の実現を見たのです。

この聖霊は、追加的な力でした。すなわち、イエスが聖霊のために祈って下さるその祈りに神の民が加わるとき、追加的に与えられるのです。わたしたちはどのように祈るかを学ぶ必要があります。そのために先人たちの祈りの模範があり、主の祈りなどイエスの教えがあります。また、主はたびたび「祈っていないさ」（ルカ 21:36）、「収穫の主に願って（祈って）、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい」とお命じになりました（マタイ 9:38）。

しかし、彼らは祈ることを学ぶのに時間がかかりました。イエスは「十二人をお立てになった。彼らを自分のそばに置くためであり、さらに宣教につかわすためでしたが（マルコ 3:14）、このお方のそばにいて伝道の働きをしているときの彼らはどうだったでしょうか。「主よ、いかがでしょう。彼らを焼き払ってしまうように、天から火をよび求めましょうか」（ルカ 9:54）、「あなたがたは、刈入れ時が来るまでには、まだ四か月あると、言っているではないか。しかし、わたしはあなたがたに言う。目をあげて畑を見なさい。はや色づいて刈入れを待っている」（ヨハネ 4:35）。イエスが目の前に刈り取るべき収穫があるのをご覧になっても、まったく見えない状態でしたから、収穫の主に祈るように言われても、その必要は感じられませんでした。必要を感じなければ、祈りません。実際に頭を占めているのは何か、それが行動に表れ伝わっていきます。

しかし、この同じ弟子たちが、変わりました。「彼らはみな、婦人たち、特に

イエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちと共に、心を合わせて、ひたすら祈をしていた」(使徒行伝 1:14)。

何を祈っていたか

「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」(使徒行伝 1:8)。

「見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」(ルカ 24:49)。
これが主の約束でした。この約束には時が指定されていましたが、そのとき彼らの思いを占めていたのは、最後に委ねて下さった働きでしたので、ずっと時計を見るような待ち方はしませんでした。いつも時を考えて語る人は、実は仕事には関心がない人です。では、彼らは何に関心を集中させ、どのように待っていたのでしょうか。

何の証人か

「それから彼らに対して言われた、『わたしが以前あなたがたと一緒にいた時分に話して聞かせた言葉は、こうであった。すなわち、モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしについて書いてあることは、必ずことごとく成就する』。そこでイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて言われた、『こう、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。そして、その名によって罪のゆるしを得させる悔改めが、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらの事の証人である』。」(ルカ 24:44-48)。

ここで、「わたしが以前あなたがたと一緒にいた時分に話して聞かせた言葉」と言われた中には、「収穫の主に願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい」ということも含まれていました(マタイ 9:38)。

以前話して下さった時には、関心のなかった弟子たちが、今度は、ひたすら祈るようになりました。それは、何かを悟ったからです。以前悟れなかったことを悟らせて下さったのは、聖霊でした。

「そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、『聖霊を受けよ。』」(ヨハ

ネ 20:22)。御霊を受けた彼らは本当の変化を経験し、働き人を送り出してもらうように、ひたすら祈るようになったのです。使徒行伝 1 章では、ひたすら祈る彼らの姿が見られます。そして、2 章ではその本人たちが働き人になりました。その祈りは自分たちのためだったのです。彼らは「神の同労者」となりました（コリント第一 3:9）。

「過去の三年間をもう一度やりなおすことができるとすれば、弟子たちはどんなにか違った行動をとることだろう」（患難から栄光へ上巻 30）。今、彼らの思いをしめているのは、この一念でした。そしてその思いが祈りとなって表れたのです。その祈りに答えて、もう一度同じ期間キリストとの同労者になることのできる機会が与えられたのです。これは、弟子たちが収穫の喜びを味わえるように、主が黙々と働いて下さった結果でした。

「このお方は信仰によってご自分の許へ来る一人びとりの魂を許し、彼を神のみわぎをなすことのできるものとし、信仰を通してキリストと一つになれるようにしてください。イエスはこれらの人々について言われる、『わたしがあなたのうちにあい、あなたがわたしのうちにいますのは、彼らが完全に一つとなるためであり』〔この結合が品性の完全をもたらす〕、そして『また、あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります』。（ヨハネ 17:23 欽定訳）。」（*エレゲッド・メッセージ* 1 巻 375）

そうです、この一つになることこそ、キリストのご品性です。これが満ち満ちたキリストの徳の高さにいたる一致なのです。彼らはキリストが何をなして下さったかの生きた証人でした。

に向かって

「マリヤよ」と言われました。

彼女の涙はすぐに払いのけられて、救い主を見ました。彼女は喜びのあまりこのお方が十字架におかかりになったことを忘れて、両手をこのお方に伸ばして、

「ラボニ」と言いました。

するとイエスさまは言われました。「わたしに触ってはいけない。わたしはまだ父のみもとに上っていないのだから。ただわたしの兄弟たちの所に行って『わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く』と彼らに伝えなさい」(ヨハネ 20:15-17)。

このお方はご自分の父によってご自分の犠牲が受け入れられたということを知るまではご自分の民からの尊敬を受けようとはされませんでした。イエスさまは天の宮廷にのぼり、その血によってすべての人が永遠の命を得られるようにこのお方が人類のために払われたあがないは充分であったとの保証を神ご自身から聞かれました。

天と地のいっさいの権力は命の君に与えられたので、イエスさまはご自分の権力と栄光を分け与えるために、罪の世にある弟子たちのもとへお帰りになったのでした。

豆腐入り青汁団子

■材料 (約 20 個分)

A	白玉粉	100 g
	青汁の粉	1 包み
	あんこ	適量
	絹ごし豆腐	50 g
	水	50ml

■作り方

1. ボールに A をすべて入れ、水を少しずつ加え、耳たぶくらいの柔らかさになるまで良くこねる（水は全部使わなくても良い）
2. 一口大に丸めたら、沸騰したお湯でゆで、浮き上がってきたら、すくって冷水につける。
3. 冷めたら、水を切って器に盛り、あんこを添える。

豆腐が入っているため、ふんわりした食感です。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理



お申込先 : 〒350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

第56話

行って、わたしの弟子たちに 伝えなさい(II)

マリヤはこの出来事があった時そこにいませんでした。しかし今ペテロとヨハネと一緒に戻ってきました。彼らがエルサレムに戻って行った時、彼女は墓にとどまりました。彼女は自分の主のお体になにが起こったかを知るまでそこを離れることに耐えられませんでした。彼女が泣きながら立っていると、

「女よ、なぜ泣いているのか、だれをさがしているのか」と尋ねる声を聞きました。

彼女の目は涙によってくもっていたので、だれが彼女に語りかけたのかに気がつきませんでした。彼女はそれが園の番人だと思って、嘆願して言いました。

「もしあなたが、あのかたを移したのであれば、どこへ置いたのか、どうぞ、おっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります」。

彼女はこの富める人の墓が自分の主にとって立派すぎるとみなされたのであれば、彼女自身がこのお方のために場所を提供しようと考えたのでした。しかし今キリストがご自身の御声で彼女の耳



(41 ページに続く)